

私の一冊

社会福祉学科 安 瓊伊 先生

社団法人全国有料老人ホーム協会・ポプラ社編集部 編
『シルバー川柳 誕生日ローソク吹いて立ちくらみ』

小鹿図書館 911.46/Z 3

私は昨年夏、韓国のインターネットサイトでこの本に出会いました。日本では2012年9月に発売され、韓国ではタイトルを変更して2024年1月に出版されました。韓国語版のタイトルは『사랑인 줄 알았는데 부정맥』(恋かと思っていたら不整脈)です。「恋」という言葉は高齢者とすぐには結びつかないかもしれませんが、このタイトルの変更から、日本と韓国の文化の違いを感じました。

この本は高齢者の日々の暮らしにある体験を、豊かにそしてユーモアに詠んだ川柳作品集です。韓国語版が出版された時は、多くの韓国の読者が笑ったり、親を思い出して泣いたりしたという感想を読み、日本語版を探して読んでみました。

川柳は五・七・五のリズムで詠む短い口語の定型詩で、人の暮らしを詠む点が俳句との違いのようです。この本には88編の作品が収められており、一気に読めば30分もかかりません。しかし、一つひとつ味わいながら読むと、さまざまな感情が湧いてきます。私も親を思い出しながら、多くの作品に笑ったり、泣いたり、恋しさも抱きながら共感しました。

例えば「立ち上がり 用を忘れて 立ちつくし」(105ページ)を読んだとき、母の姿が思い浮かび、そのとき気づいてあげられなかったことを後悔しました。また、「喜寿だけど 恩師の前では 女子高生」(115ページ)を読んだときは、母の表情を思い出し、思わず微笑んでしまいました。「万歩計 半分以上 探しもの」(35ページ)を読んだときには、“近いうちに自分のことになるな”と思い、他人事には思えませんでした。

私は介護を専門にしていますので、高齢者と関わる機会が多くあります。家族には祖父母や両親がいましたし、仕事を通じて多くの高齢者と接しています。介護に限らず、人との交流では、相手を知り、理解することが大切です。本書は、高齢者の日々の暮らしをユーモアに詠んだものではありませんが、視点を変えれば高齢者の身体の変化や気持ち、悩み、特に喪失感について、よりリアルに感じ取ることができる作品です。高齢者の気持ちを想像し、介護上のコミュニケーションをとるうえでも参考になる内容と感じます。

この本は全14巻のシリーズの第1巻です。私はまだ他の巻を読んでいませんが、ぜひ読んでみたいと思っています。家族に高齢者がいる方、ボランティア活動をしている方、高齢者と関わる仕事を考えている方や、ホッとしたり笑ったりしたい方にもぜひ読んでほしい一冊です。